ナイフ一本あればいい。

患者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつからかは知らない。誰もわからない。

けれど彼女は確かに。

ナイフを持って生きていた。

目次

ナイフがあれば化け物に勝てる。 1
ナイフがあれば子育てが出来る。 13
ナイフがあれば神様だって倒せる。 24
ナイフがあれば交渉も出来る。 38
ナイフがあれば教訓を教えられる。 49
ナイフがあれば暗躍もできる。 60

ナイフがあれば化け物に勝てる。

暗い森の中。
少し前までは名前すらなかったこの森の中を、たった一人、明かりと共に歩く銀髪の女性が一人。
「…また随分と散らかったわね」
彼女は辺りから漂う血と肉の匂いに顔しかめながら森の奥へと進む。
辺りからは獣の声が鳴り、よくわからない植物がウネウネと地べたを這っていた。
少し上を向けば巨大な百足と見るからに凶暴そうな鳥が争っている。
だが彼女は特に気にした様子もなく進む。まるで見慣れた光景のように。
「…はぁ、またそんなに汚して」
暫く進んで、ようやく彼女のお目当てのモノが見つかった。
「……」
それはヒトガタではあった。確かに人間の女の形をしていて、死んだように座り込んではいるが、呼吸はしている。生きている。
その女のヒトガタの周りは今まで以上の血と肉が散らばっているのだが。勿論、本人も血と肉にまみれてもはや死体にしか見えない。
「と――」
――瞬間だった。
ヒトガタに声を掛けようとした彼女は、一瞬の内に押し倒され、組伏せられ、『ナイフ』を首に押し付けられた。
犯人はどうやらそのヒトガタのようだった。
「……私よ、刀子」
「……あれ、永琳じゃん。なにしてんのよ」
銀髪の女性はため息をついて、ヒトガタはまるで無意識にこの行動に出てしまったように。
二人の視線が交差した。

私は、外の調査に出ていた。いつも通り護衛を数名連れて、外の生物と植物。
……あと、妖怪の。
でも毎回思うが、夜に行く必要は微塵も感じない。明るいほうが見やすいではないか。
まぁそれは素人の私の意見であって護衛達曰く、生物が寝静まったタイミングが一番安全だからしいのだけど。
「八意様」
「なにかしら」
「八意様に私ごときが意見を言うなどもっての他なのですが……いつもと雰囲気が違います」
護衛の一人がそんなことを言い出した。
……勿論、私が気付いていない訳がない。何十回と通った道だ、何が生息していてどんな道なのか、全て説明できる。
だが、今日は違った。今日だけは違った。
１つ、いつもは現れる生物が一匹も現れない。
２つ、何時もより血の匂いが強い。
３つ、妖怪…この辺りの妖怪が影も見せない。
明らかに異常だった。何十回と通った中で、初めてのことだった。
「八意様…」
護衛の一人が帰還を推奨する。
安全を考えれば、確かにそれが一番得策だった。一度帰り、こんな護衛部隊ではなく軍隊や他の研究者達に呼び掛けてから改めて調査

すればいい。
だが私は先へ進むことを選んだ。研究者特有の好奇心だけで進むことを選んだ。
焦る護衛達を連れて、先へ進み、少し開けた場所に出た。
そしてそこにあったのは、やはりと言うべきか、異様だった。
「なんだあれ…」
護衛の一人が思わず口に出した。
だが、今回ばかりは同意見だっただろう。
それは、なんと形容したらよいのだろうか。ただそのままの状況を言葉にするのらば、
『巨大な狼の妖怪の群れで積み上げられた山の上に、ナイフ一本を携えた血まみれの全裸の女が居た。』
しかし。そんな状況には似つかわしくない程、その女は美しく、神秘的で、神々しくさえもあった。
血か地毛かわからない赤い、長い髪を垂らしながら、女は護衛や私の視線など気にしてないように、山となった狼の妖怪の上に寝そべっていた。
「…え？」
寝そべって、どうやらそのまま寝ているようだった。
これは…どうしたらいいのだろうか。放ってはおけないという気持ちも勿論ある。同種族で同姓と思わしき存在が全裸でこんな所に居るのだ、気にならない訳がない。
しかし、此方も当然のことなのだが、こんな状況を見て恐怖を感じない訳もないのだ。
「永琳様…如何なさいますか」
護衛達が何時でも私を守れるようにと配置につく。
大量の死体。ナイフを持った血だらけの女。
この異質な状況に護衛達は危険を感じ取ったらしい。流石日頃から危険と隣り合わせの護衛の職に就いているだけはあるようだ。私なんてまだ実感が沸いてないというのに。
一応弁解すると、私も何度も危険なことは犯している。だが、相手

がアレだ、危険を感じようにもどうにも気が抜けてしまう。手に持っている物を除けばだが。
「そうね…発信器は付けれそうかしら」
「取り付け自体は簡単です。そうなさいますか」
私出した案、発信器を付けて暫く様子を見る。だった。
「えぇ。なるべく刺激しないように、発信器だけつけて暫く監視しましょう」
「了解です」
護衛の一人が懐から小さい機械を取りだし全裸の女へ近付いて行く。
……ふと思ったが、状況とナイフで霞んではいるが仮にも全裸の女。護衛の中には男も混じっていた筈だが……いや、やめよう。護衛が全員女を凝視しているのは警戒から来るものだと思っていよう。
そんな、場違いな考えをしていたのは間違いだと、私は直ぐに思い知らされた。
「――――え？」
気がつけば、私の顔面に生暖かい液体が掛けられていた。
咄嗟というか、人間の無意識的行動の内にその顔についた液体を手で拭いて、そして気付いた。
これは血だ。
「全員戦闘体勢!!」
護衛の隊長格の一人が瞬時に状況を理解し、前を見ながら周りに声を上げる。
だけれど…そのことに気づいていたのは私だけ。
「どうした！返事は…」
”ゴトリ”
なんてことはない、その隊長格の首が地面に落ちた音だ。
残った首無しから血が飛び散る。
首無しが力なく自身の血で出来た血溜まりへ倒れた。
首と目が合った。
「う…うわぁぁぁぁ!!?」

護衛の一人の脳が２つの死体を遂に受け入れたらしい。恐怖と戦慄の声を情けなく上げながら、背を向けて逃げ出した。
「うわぁぁぁぁ！あっ…」
しかしだ、女はどこへ行った？
答えは逃げた護衛の目の前だ。
「あ…あ……ぁっ」
頭に一突き。
ヘルメットと頭蓋骨なんて関係ないように、女が突き刺したナイフは根元まで護衛の頭に突き刺さった。そしてそのまま横へ、護衛の頭がケーキのようにカットされた。
”ドチャ”
脳と血を撒き散らしながら死体は倒れた。
そして私はようやくこの状況で、相手の獲物をハッキリと視認したのだった。
――刃渡り…その方面は素人なので目測になるが２０ｃｍほど、ナイフとは言っていたが小さい小刀のようだ。柄と刃だけで出来たシンプルな物のようだが、その切れ味は先ほど見た通り。危険と言う他ない。
しかしだ、今更な疑問だが何故、何故こんな獲物を彼女は所持している――
「あ」
気がつけば、私以外全滅していた。
辺りにはもう、血と肉しか残っていなかった。
「――――」
女は、言葉とは言い難い獣の呻き声のようなものをあげながら私へ近付いてきている。真っ正面だ。
返り血で赤色にしか見えない獲物を揺らしながら。
地面に着くほど長い赤髪を垂らしながら。
神々しさすら感じた裸体を、血で汚しながら。
彼女は、腰が抜けてへたりこんでしまった私の前まで来た。来てしまった。

「」
彼女はナイフを構えた。狙いはおそらく私の首。
一瞬だろう、ヘルメットと頭蓋骨すら意味をなさない切れ味。一瞬で、私の首と体はバイバイするだろう。
――あぁ。決して短いとは言えない人生だったが、贅沢を言えばもうちょっと生きたかった。
あぁ。走馬灯というのは本当に見えるのか――と科学者らしく関心を抱いたところで、あれ？と私は残り短い命で考えついた。
――そもそも、先に手をだしたのは此方では？発信器をつけるだけだったとはいえ、それを彼女は敵対行動と見なしたのでは？
そうだ、彼女は最初眠っていた。血と肉にまみれながら、狼の妖怪を寝床にして眠っていた。
それを妨げたのは私達では？
だから彼女は攻撃に出た。
自分に害を与えかねない私達を排除すべく。
あぁもう。気付くのが遅い。もっと先読み出来ていればこんな事態には……とはいえ、もう遅い。　護衛達は全滅し、私は殺される一歩手前。有り体に言えばもう、無理。
諦めも諦め。私の精神はもう終わりを受け入れていた。
「――ごめんなさいッ！」
あれ、今のは誰の声だろうか。
「そんなつもりじゃなかったの！決して貴女に害を与えるつもりはなかったの！ごめんなさい！許して！殺さないで！」
……精神は諦めても、体は正直だった。ということ。涙やその他体液で顔を濡らしながら、みっともなく、すがり付いて懇願していた。
助けてください。殺さないでください。
果たして、そんなプライドすら捨てた私の命乞いに彼女は。
「……」
彼女はなにも言うまでもなく、ただ黙ったままナイフを下ろし、再び狼のベッドへ寝そべった。
……本当に何事もなかったかのように、先程の惨殺劇が嘘のよう

に。
「はっ…はっ…はっ…」
緊張と恐怖で私の呼吸気管はおかしくなっていた。動悸が起きて今にでも倒れてしまいそうだった。
「あっ…くぅ…」
それでも私は、上半身だけで動かない下半身を引きずってその場から離れようとした。死に体で、泥まみれになりながら私はその場から離れた。
もうあの場に居たくなかった。それほど私の体は恐怖に染まっていたのだろう。逃走本能だけで動いていたに違いない。
今思えば、どっちにしたって危険なのには違い無かったわけだが。

「全く……時々来ないと服も体も血だらけなんだから貴女は」
「ケケケ…面目ないね」
ナイフを持った彼女……今は刀に子と書いて『トウコ』。わかりやすい名前だ。
誰のものかもわからないほど血を吸ったシャツを脱がして、今朝洗濯したばかりのタオルを手渡す。どうせすぐ汚れるだろうが。
「ほらタオル、とりあえず拭いてしまいなさい」
「せんきゅー」
彼女はタオルを受けとると、顔、上半身、頭。下半身は私が前に止めたので今はしないが。順に拭いていく。
「うへぇ、白いタオルが血で黒くなっちゃった」
「毎回よ。洗っても落ちないから捨てることになるのよそれ」

「毎回新しいタオル買ってくれてるの？ありがたいなぁ」
「……別に、親友じゃない私達」
「ケケケ……永琳の親友発言ってどことなく裏を感じるよね」
「射たれたい？」
　冗談冗談。彼女はそう言って立ち上がった、近場の水辺に行くようだ。こびりついた血を落としに行くのだろう。……私か来ないとそもそも落とすという発想すらできないのか。
「一緒に入る？」
「水よりお湯のがいいわね」
「あら贅沢。きっと水なんて昔ほど貴重じゃないのね」
　彼女が歩き出すので、私も釣られて歩き出す。
　…もう結構になるルーチンワークのようなものだ。
「～♪」
　鼻歌を歌いながらも、決してその手からはナイフを離さない彼女を見て思い出す。
　――あぁそうだ、今は仲良くしているけれど、彼女との出会いは最悪だった。
　もう何年も前、思い出すのも苦労するほど前の話だ。けれど。
「その後のことがあったからこんな関係なのかもね」
「んー？なんか言ったー？」
「別に…貴女は変わらないわねって、ありふれた台詞よ」
　そう。あれは私が酷い形相で逃げ出した後だったか。あの出来事がなければ私達はこんな関係ではなかっただろう。

――

「はぁ…はぁ…はぁ…」
私は逃げていた、あの恐ろしいモノから。
逃げると言っても、未だに満足に動かない下半身を引きずってだが。万が一追いかけられてたらもう既に捕まっていただろう。
しかしだ、やはり今日の私は頭が鈍いらしい。こんなことすら予測出来ないとは、天才の名が廃る。
「――――」
声だ。声だった。無論声と言ってもただの声ではない、獣の、それも大分狂暴な奴。それが、私の前から聞こえてきた。
「しまった…ッ」
懸念していた状況の筈なのに、全く意識していなかった。先程の状況から逃げるのに必死ですっかり忘れていたらしい。
そもそもこんな森に来たのは最近増えている狼の妖怪の動向を探る為だというのに。
「――――」
そして、私の前に、一体の狼が立ち塞がった。
とても大きく、狂暴そうで、鋭い視線を私へ向けていた。
おそらく、この個体は前より度々報告されていた群れのボス……それにしては、やけにお怒りのようだが。
あ。と私がその理由に気付いたと同時だった、巨大な狼は私へ襲いかかってきた。
「なんて日…」
自棄気味に呟くと、私は目を閉じた。もう、ダメだ。私は今日死ぬ定めなのだと――
でもまぁ、これは普通のことだと思うのだけれど、一般的なことで別に私に限ったことでない筈だけど。
目を閉じた状態で私じゃない他の肉を切る音がしたらビックリして目を開けるわよね？
「――――ッ!!!!」
目を開けた先では。これは見たままの光景を言葉にするのだが―

――先程よりもそらに怒り狂った様子の狼と、その巨大な狼の頭にしがみついてナイフを突き刺す全裸の女がいた。というか、さっきの女だった。
「アァァァァッッッ!!!」
「――――!!!」
狼と女が争っている。私の目の前でだ。
女がナイフを振ると、おそらく丈夫なのであろう狼の皮膚を容易く貫き、切り刻む。
狼が女を振り落とそうと、狼は激しく体を動かす。だが女は片手の両足だけで、狼にしっかりとしがみつき、離れない。
「ひっ…」
私は再び女に対する恐怖を思い出した。既にトラウマレベルまで至っているようだった。
知らず内に後ろに下がって、木にぶつかって止まって、それでも下がろうとして、やっぱり無理で。
そんな一人相撲をしてる内に、戦況は変わっていた。
「あッ…が…」
狼が自分の背中ごと女を地面に叩き付けたのだ。狼と地面にサンドされて、女は苦しそうに声をあげた。手も離してしまっていた。
それを好機と見た狼は体を起き上がらせ、爪を光らせた。あの女は恐ろしい身体能力を持っていた、しかしだ、いかに頑丈とてあの爪で引き裂かれてた只では済まないだろう。
「――――!」
狼は躊躇することなくその爪を倒れた女へ向けた――
因みにだが、私にとってはこの勝負、どっちにしたって絶望しかない。女が残っても狼が残っても殺されるだろう。
だけど私は、この先の光景に、何時しか恐怖を忘れていたのだった。
「ア――――」
一瞬だった。
その決着はまさしく瞬きの内に終わった。
女はその身に凶爪を受けながらも、完全に引き裂かれる前に狼の首

を切り裂いたのだった。あの体勢から、一瞬の内にだ。
「……」
女は苦痛に声をあげる……こともなく、倒れた狼の死体の上に立ち。
「アアァァアァアアァアアァァアアァ！！！！！」
大きく咆哮を上げたのだった。
月に照らされ、たとえ体は血で染まっていようとも、その光景はまるで絵のようだった。その方面に学のない私ですらそう思う、まさしく絵になる光景だった。
「アアァァア……ァ…」
だが、その長い咆哮も止まる。女が倒れるのと、私の下半身が動くようになったのは、奇しくもほぼ同時だった。
「これ…」
女の傷は決して浅くはなかった。研究者として、一応医師としての見識を持つ私は女の体の酷さに思わず声を失った。
先の戦いの骨折、斬傷、出血多量。内蔵や肺も影響を受けていそうだ。しかし、これだけではない。よく見てみると体のあちらこちらに切り傷や打撲後が見える。
私の予想はやはり当たっていたようだった。
――道中妖怪と出くわさなかったのは、彼女が殺して回っていたからだ。この傷はその戦闘でついた傷だろう。
「……」
そして巨大な狼…群れのボスが何故あれほど私に怒っていたのかの予想もはっきりとした。狼は、同胞が『人間』に殺されているのを理解していたのだろう。それで私に怒りをぶつけてきたのだ。向こうにとっては女も私も大した違いはないだろう。
………さて、答え合わせはこんなものでいいだろう。それより前の女をどうするかだ。
「助けるか…見捨てるか…」
彼女の出血量を見ると、このまま放置すれば彼女は確実に死ぬだろう。あれだけの護衛を殺してくれた奴だ、当たり前だ、報いだと言い

たい。
しかし、それに待ったを掛けるのも間違いなく自分だ。
気になることも、沢山ある。今彼女を殺せばあらゆる疑問は闇へと消える。
科学者と人間。好奇心と常識に挟まれて私は――――
「……はぁ。どっちにしたって、これを放置して万が一、『死ななかったら』一大事ね」
まぁ、私だって人間だ。適当な理由をつけて正当化するのもなんらおかしくはない。そう、当たり前当たり前。
幸いなことに彼女の体は軽く、私が背中におぶってもあまり苦労はなかった。
「トラウマより好奇心か……ここまで来ると生粋ね…」
自分で言っててちょっとどうなんだと思う。
「ん……」
それと、悔しいけど、寝顔は可愛かったと付け足しておこう。気絶しても決して離さないナイフを除けばだが。
……
――何故彼女は全裸で一人、あの場所にいたのだろう。
――何故これほど凶悪な武器を持っていたのだろう。
――何故狼達を殺していたのだろう。
疑問は次々と沸く。はたして彼女は何者なのだろう？
「う…ん…」
「全く…気楽にしてくれちゃって…自分がどんな体でどんな状況かわかってるのかしら」
彼女を背に持ち、街へと歩みを始める。
気付けば朝日が見えていた。

ナイフがあれば子育てが出来る。

「……」

…緊張していた。

「……」

…この私が。

「……」

…この扉の向こうに居る一人の人物に会うだけのことに。

手に持ったトレイがカタカタと震える。その上に乗るカップに入った紅茶が波を立てる。

私は、十六夜咲夜は、緊張していた。

「…ふぅ……」

息を吐いて、覚悟を決める。

どちらにせよ避けては通れぬ道だ、仕方ない。なに、簡単なことだと思い込めばいい。育て親と久々に会う程度、お茶の子さいさいだ。そう思い込め、私。

「…」

いざ。

扉を開けた――

「あら咲、久しぶりね」

「……はぁ…変わんないですね」

客室の椅子の真ん中に堂々と座った女性。

彼女は私を見ると、昔と全く変わらない顔と容姿のまま話しかけてきた。……こういうのは私から話しかけるべきだと思うのだが。

「ケケケ……変わらないのは見た目だけ、随分大人しくなったものよ私も。それにしても敬語が上手くなったわね？」

「えぇまぁ、随分と経ちますもの」

「そっか…もうそんなに前か、私があんたを此処に置いてったの」

彼女は遠い思い出を懐かしむように、目を閉じた。

……彼女は私の育て親で、師匠だ。切っても切れない関係で、私はなんだかんだと彼女に感謝をしている。最初の緊張はあくまで久々に会う故の緊張だったわけで。決して他意はない。…少し嘘をついた。

「それと、今は咲ではなく、咲夜です」

「……あら、名前を与えられたの。ここの主は余程従者想いのようね」

「えぇ、一生仕えてもいいと思うぐらいには」

彼女はケケケと笑う。まだ少し緊張が抜けてない私だが、彼女はこの会話を楽しんでいるようだった。

……だが緊張も許してほしい。だって彼女は最初から今に至るまで、ずっと片手にナイフを持っているのだから。

「……その、ナイフは仕舞わないので？」

「んー？……あぁこりゃ参った、また知らない間に抜いちゃってた」

ナイフを仕舞う。

だけどどこに仕舞ったのか、この距離で見ている私にもわからない。相手に獲物を見せない、彼女の得意とする技能の一つだ。……教えられたのだから、そりゃ知っているとも。ナイフをずっと手に持つ癖も変わらない。

「まぁ今日は咲……夜の顔を久々に見たくなってね。座ってよ、久々に会話しようぜ」

彼女のお誘いだった。いや…私には仕事が。

「問題ないよ、今日1日メイド借りますって許可貰ってるから」

……本当だろうか。なんて疑っても仕方がないのだが、多分本当ではあるんだろう。

昔何度も殺されかけたせいでなんとなく信用が出来ないのだった。

というか、ん？1日？

「そうだよ？だって、この後やるでしょう？弟子の成長は見たいものね」

さらっと言ったが、私にとってそれは死刑宣告にも似たものだった。

動揺で揺れる視界を感じながら、ふと思い出した。

――昔も、師匠はそんなかんじだった。

――

「じゃあ教えるわね」
「……なにを？」
赤い髪をした女性は、私にそんなことを言ってきたのだった。
一応言っておくと、彼女とは赤の他人という訳ではない。一緒に旅をして1ヶ月程度の仲だ。
「なにって…これよこれ」
彼女は先程からもずっと手に持っていたナイフを私に見せびらかせた。……戦闘術でも教えるとでも？
「戦闘術じゃないわ、生きるための術。咲がこの先死なないようにするための術よ」
義務感なのかそうではないのかは知らないが、どうやら私にそういうことを教えるらしい。此方の拒否権は勿論なかった。
彼女は、いい？よく聞きなさい？と前置きをして
「咲、獲物はしっかりと持つ。
離してはダメ、武器を捨てるのは敗北と同じよ。
あんたの体で近接なんてもっての他。
急所をただ狙いなさい。当たれば勝ちよ。
飛び道具としてならまぁ許せるわ。ただ、相手に利用される可能性

を考慮するのと、もう1つ以上武器を隠し持っている状況だけにしなさい。
なにを使っても構わない、殺すのは生きるため。相手のことなんか考えるのはやめなさい、躊躇は隙を生む」
……まだ二桁にも満たない年齢の少女に、そんなことを洗脳の如く教え込んできた。確かに私は同年齢の子達と比べると少し大人びてるけれど、それを全て覚えきれるほど賢くはなかった。
「……わからないよ、トーコさん」
素直にそう言った。
ナイフを持った彼女…今更だが私はトーコさんと呼んでいるが。私はどうやら彼女から処世術を教えてもらっているようだ、これが世間で言う処世術かは私にはわからなかったが。
「わからない？うーん、確かに戦ったこともないのに言葉だけ覚えさせてもねぇ……そうだ、とりあえず死にかけてみましょう」
え。と言った次の瞬間には、私の太腿は彼女の手にあったナイフに貫かれていた。
「ぎッ……いあああああああああああああ!!!??」
痛みに堪えかねて倒れる私。ナイフが抜かれると、貫かれた箇所から血が流れて止まらなくなった。
「太腿。刺しても即死はしないけれど、まぁ相手の機動力を落とすのなら効果的じゃないかしら」
当の本人は全く気にしてないように解説を始めた。
今も私は痛みで叫んでいた。……そうだ、彼女はオカシイ。なにがそうさせたか幼い私にはわからないけれど、こういうことが平然と出来る彼女がオカシイことは幼くても理解していた。
「ま、私から言わせてもらえば機動力を落とせるタイミングがあるならさっさと頭か胸か首を刺してしまえと言いたいけどね。っておーい、大丈夫ー？」
勿論大丈夫ではない。もはや声を上げることもできず、視界が白く霞んできていた。血を流しすぎた、ということか。
……死の一歩手前とはこういうのだろうか？だとすれば彼女の試

みは見事成功だ。この後すぐ死んでしまうことを除けば。
「……」
彼女が何か言っているが聞こえない。
私は結局目を開けないまま、彼女の突発的な試みに巻き込まれてその短い生を終えた――――

――――

「はっ！」
「なんのっ！」
私と彼女は、館のメインホールで打ち合っていた。
勿論、組み手でもなければ接待でもない。彼女は私を殺しに掛かっている、だから私も全力で抵抗している。
……彼女が昔私に教えようとしていたのはこのことなのだろう。『相手が殺しに掛かって来てるんだから、此方も全力で殺し返してやれ』と。
最初のあれ以降は私は武器を持たされ、時折殺しに来る彼女から全力で抵抗して、全力で逃げた。
そんな生活を数年過ごした。
それが彼女の教え方。
彼女と正面から打ち合えるようになる頃には、私の身長も大分大きくなっていたものだ。
「あっはは！凄い数のナイフ！どこにそんなに仕舞ってたのかしら！」
そしてそれは今も変わらない。私は彼女に置いていかれた後も、た

だ磨いた。腕を、戦法を、能力を。いつ殺しに来るかもわからない彼女を想いながら。
「ただのマジックですよ！さっきの師匠みたいな！」
飛び道具として使うナイフは常に１０本は携帯。
メインのナイフは２本。
投げたナイフは能力で回収して相手に利用させない。
壁の反射すら利用して、ただただ狙うのは相手の急所。ついでに近寄らせない。
……教えられたことは気がつけば体が覚えていた、だからそれを伸ばした。教えられたことをスムーズに行えるように、研究した。
「ほぼ常に急所に飛んで来るナイフとか怖い！打ち落としても次が来るし！落としたナイフは消えるし！随分成長したんじゃないの!?」
怖い、なんてほざきながら彼女の顔には笑顔が浮かんでいた。
果たしてどんな理由の笑顔なんだか――
弟子の成長を喜ぶ？ないない
相手が強くて楽しい？ないない
単純に彼女は私を『どうやったら殺せるか』という状況を楽しんでいるだけだ。……全く自分の師匠ながら変態がすぎる。
「それはどうも…」
私も私で死にたくないので彼女の間合いに入らぬように、それでいて自分の投げナイフの威力が落ちない範囲に逃げながら、追い詰める。
……あぁそうだ、この勝負の決着の付け方なのだが。なに簡単だ、相手の急所に一本入れたら勝ち。
え？死ぬ？はは、だから私はこうやって逃げてるのよ。死なない術を全力で使いながら。
「ところで！今回はどこで終わりにしますか！」
「無論、死ぬまで！」
一応聞いてみたが、返事は予想通りもいいところだった。
今まで何度もコレをしてきたが、本当に変わらない。最初刺された時から一切変わらない。……あぁ、ちなみにあの最初のは普通にあの

後生きてたよ。師匠がなにかしたみたいだけど。
「あはははは!!」
彼女は笑う、私が投げるナイフを捌きながら。
……さて突然だが、気づいた人は気づいただろうか。彼女が世が世なら、快楽殺人者と呼ばれる類いのモノだということを。殺しを楽しみ、殺しを生き甲斐とする。生きるためとかなんだとか言いながら、結局楽しんでいるのだから質が悪い。
もっとも、彼女が殺すのは人間に限らないし、彼女は何時からか、既に意志が芽生えた頃には生き物を殺していた。
彼女自身から聞かされた話だ。
「どうやって刺そう、どうやったら切れそう。」
そんな彼女に拾われた私は不幸なのだろうか。
突然刺され、突然切られ、突然殺し合いが始まる。そんな関係の彼女が育て親なのは、はたして幸運であるのか。
違うだろう、世間一般的にそれは不幸だ。
しかし、私は彼女を慕っていた。親愛を向けていた。感謝もしていた。
…彼女を家族と、母親と呼んではダメなのだろうか。
「…んー?」
普通の母親ならば、娘にこんなことはさせないだろう。
「急に止まってどうしたの咲――」
私は、彼女に抱き着いていた。こんな状況だというのに、武器を全て放り投げて、彼女の体を抱き締めた。離さないように。
「近接は出来るだけするなって……もう、どうしたのよ」
投げ技でも行おうとしてると思われたのか、彼女はナイフを構えたが、なにもせずただ肩を震わせる私を見て動きを止めた。
「どうして…置いていったの、トーコさん」
私の声も震えていた。それはずっと聞きたかったこと。
抑えようとはしていたが、彼女の顔を見る度に想いは募ってしまった。
「私は…貴女の娘ではダメでしたか」

「……」
「戦う術を覚えました、生きる術を覚えました、作る知恵を、支える知恵を、話す知恵を。思い付くこと全て覚えました。でも貴女は私を置いていった」
なにがダメだったのですか。
その言葉は喉が掠れて言えなかった。
「……」
私は無言になった。彼女の反応はない。
――あぁやはり、私は彼女と居る資格はないみたいだ。
そう、思った。だから離れようとした。
「咲夜――いや、咲」
でも、離れられなかった。彼女が私の体を抱き締めたからだ。
「お前がなにが言いたいのか、よくわかる。あの時は仕方がなかった、言い訳だけど。
……でも、これだけは言える。間違いなくお前は私の娘よ」
……その言葉を、聞きたかったのだろう。
それは子供なら誰もが思う疑問、当たり前だと思うことを疑問に思う。――自分は親に愛されているのだろうか?そんな疑問。その答えを得るのが、私は少し遅かったということ。
「ごめんね咲、置いていったりして」
「トーコ…さん……」
私は、親の愛を知らずに育った。
だからこそ、どんな形であれ彼女が言ったことに応えようとした。刷り込み効果なのかもしれない。それが始めてだったから、それを愛と勘違いしただけかもしれない。
けれど、私はこの人を愛していた。
「今日は…やめにしよっか。久々に一緒にお風呂とか入りましょ」
その言葉に、私は笑顔で頷いた。

わたしは、魔女だった。
わたしは、他の人と違っていた。
――なんだこいつ、気味が悪い。
わたしは、不思議な力を持っていた。
産まれつきの、時間が止まってる感じの。
――きっと悪魔よ！
わたしは、捨てられた。
わたしは、捕まった。
――その化け物を殺せ！
変な人達がわたしの体を触って、痛いことして、殺そうとして。
わたしはなにもしなかった。――なにも知らなかったから。
――なんだお前は…ここは国の施設だ……ぞ……？
でも空に浮かぶ眩しい物が何度も昇った何時か、その日だけは触られること、痛いことも、殺そうとすることもなかった。
――緊急！緊急！侵入者は一人！職員と収容者を次々と殺している！
大きな音が響いていたけど、わたしにはそれがなにかはわからなかった。
暫く音が鳴った後に、わたしに痛いことをしていた人の一人がわたしの目の前に来ていた。
――助けてくれ！あの化け物を殺してくれ！
檻？というものにすがりついて、その人は変な顔をして、涙を流しながらわたしにお願いをしていた。……けれど、なんでそんなことするかがわたしはわからなかった。

――ひぃぃ!?お願いだ助けてくれ金ならや……
「あら、金で釣られるような軽い女に見えて？」
頭が無くなって動かなくなった、無くなった頭は変な顔のままだった。
「職員は今ので最後かしら。手応えのない」
頭がなくなった人のその横には、赤い髪の綺麗な女の人がいた。
「ふーん？こんな小さい子も牢屋に入れられる時代なのねぇ」
女の人はわたしを見ていた。
「そうだ。ねぇ、あんた此所から出ない？折角だし一人ぐらいは生き残りがいてもいいじゃない」
わたしには、女の人言ってる意味が少しだけ理解できた。わたしを出そうと言うのだ。
「どうせだし可愛い女の子の方がいいわよねぇ。それそれと」
女の人は手に持ってた武器でカギを開けたみたいだ。手際？が良かった。
「そら行くわよ」
女の人がわたしの手を持った。
「ケケケ……大した奴は居なかったけどまぁ、結構殺せたし今日のところは殺さないであげる」
女の人はわたしを肩で抱えながらも、帰り道にいた残っていた人をすれ違い様にを突きさしながら、走っていた。
「でっぐちー」
するとあっという間に、出口だった。
将来のわたしっぽく言うと、正面玄関から堂々と、行きも帰りも堂々と。彼女はまるでちょっと寄り道するように、1つの施設から帰還した。ナイフは一本で。
「じゃ、後は自分で頑張んなさい。私はまたどっか行く――って、どうしたの？」
わたしは、何故か女の人の服を持っていた。
……離れたなくないのかな、寂しいのかも。
「……あぁもしかして、『なにもない』子ねあんた」

女の人はなにか考えてるみたいだった。
さっきの人みたいに頭取れるのは嫌だな、とわたしは思った。
「さてどうしようかなー。紫に渡すのも気が引けるし…」
武器をグルグルと、ピエロみたいに回したり投げたり。女の人は怖くないのだろうか。
「うーん。まぁいいけどねぇー。どうせ一人は暇だし、小さい子連れてたら入れる場所も増えるでしょうし」
突然、女の人はまたわたしの手を取った。
……今度は、さっきと違って優しい持ち方だった。
「一緒に行きましょ、そんで教えてあげるわ。この世界の生き方を」
それからわたしは何も知らない頭で理解した。
――この人に着いていけばいい。
それは生存本能だったのか、目の前の安全にとびついた結果だったのか。この1ヶ月後ぐらいに起きる大惨事のことを思えば安全にとびついた結果っぽいけれど。
とまぁ、正解は今となってはわからないけれど、これだけは言えるのだ。
――あの時着いていったから、今の私は幸せなのだと。

ナイフがあれば神様だって倒せる。

なんで。

「はっ…はっ…はっ…」

なんでだ。

「はっ…くそっ…」

どうして。

「はっ……あっ…くっ…」

どうしてこうなった。

「クソ…足が引っ掛かった…早く逃げ……」

「はい残念」

「あ――――」

首が無くなった自分の全身を見下ろしながら思う。

どうしてこんなことになってしまったのか――――

――――

「おや、そこな綺麗な人。如何しました」

今日は運の良い日だった。

作った作物は近年最高の出来だったし、普段は村人同士の取り合い

で捕まえるのすら難しい鹿を捕まえることもできた。他の村人が何時もに比べて少なかったからだった。
しかもその帰りに旅の途中と思われる女とも出会えた。
赤い髪のとても綺麗な女だった。
「……旅の途中に食料が無くなってしまって…獲物を捕ろうにももうすぐ日が暮れる…どうしようかと思っていたところだったのです」
しめた。と思った。
今日捕らえたばかりの鹿が自分の背中にあるし、作物だって今日のは最高の出来だ。神様に奉納する分を除いてもどうせ一人では食べきれないし、それなら綺麗な女と食卓を囲むというのも悪くはあるまい。
そしてあわよくば――――
そうと決まれば、と思い女を誘った。
「え?アナタの家にですか?」
勿論。
「この通り価値のある物は持ち合わせてはおりませんが…」
構わない。むしろ価値があるのは女じし……んん。
「恩返しを期待されても困りますよ?」
なぁに。一晩程度なら恩返しなんて必要ない。……此方は勝手にやるしな…
「そうですか……わかりました。ありがたくご一緒させて頂きます」
今日の自分は運がよかった。
だからこんなにあっさり誘いを受けられたことも、今の自分は掠りも考えないことだった。

女が寝て、ついにこの時が来た。女は警戒なんて感じさせない寝方で、自分が敷いた寝床に横たわっている。
……女が寝床で寝たことで自分の寝る場所が無くなってしまった

が、これからすることを思えばそれも気にならない。
「さて…存分に楽しませてもらうか…」
ほくそ笑んで、女の寝床に近付いて――

ザクッ

ザク？
奇妙な音と共に、自身の下半身から鈍い痛みを感じた。奇怪と思って下を見てみると。
自身の右のももに、小さい鉈のような物が突き刺さっていた。
「ぎっ」
急に起きた衝撃に耐えきれず、今にも叫びそうになった瞬間。口を塞がれ、声は行き場を失った。
「煩いから、今は夜でしょ」
口を塞いでいたのは女の手だった。
「あー変なとこ刺しちゃった…これじゃ死なない…」
女は残念な物を見るような目で自分のももに突き刺さった物を見ている。
どうやらこれを刺したのも女の仕業のようだった。
「ま、スペアで使い捨てだから別にいいけど。
――私を抱きたいなら、私を殺せるようにならなくちゃ、殺したら、好きに出来るのに」
死体に興味はない。と言いたかったが、痛みと流れる血で頭が上手く動いてくれなかった。口も塞がれていたのもある。
「アナタで３８人目。村一つ潰せるかどうかって思ったけれど、こんなにいいペースとはねぇ」
――今、なんと言った？３８人目？
「んー…驚いてるって顔ね…まぁ多分殺した数のことでしょ。そうよ、３７人殺して、アナタで３８人目。色々やったわ。
屈強な男を殺した
あどけない子供を殺した

子供を身籠っていた女を殺した
親切に道案内してくれたおじさんを殺した
畑を耕していた青年を殺した
目につく奴らを殺した。全員、これで一刺し。アナタは……二刺しになりそうね」
痛みによる絶叫は、いつの間にか恐怖による呼吸の乱れに変わっていた。
そうか、そうだったのか。鹿の取り合いが起きなかったのは、目の前の女のせいだったのだ。それを知らず陽気に鹿を捕まえて、元凶にそれを振る舞って、手を出して刺されて。
自分はなにをやっているのだろう。周りとあまり付き合っていなかったとはいえ、３７人居なくなったことに全く気がつかないなんて。
「気がつかなくて当然よ。だってそれ、今日の出来事だもの。情報が回ってなかったんでしょ」
今日、３７人、殺した？なんだ…それは…
「さてと……お喋りもつまらないし、さっさと殺しましょうか。逃げたければ逃げれば？追い付いたら殺すから」
自分は逃げた。
ももに刺さった小さい鉈のようなものを焦りと恐怖で急いで抜いて、血が出てるのも気にせず一目散に逃げ出した。
体が重い。体が動かない。足に力が入らない。
でも逃げた。アレが怖かった、恐ろしかった。
『人を３７人も殺しておいて』まだ殺そうとしている精神が恐ろしかった。
『村一つ潰せるかどうか』で人を殺せる精神が恐ろしかった。
「はっ…はっ…はっ……くそっ」
どうしてこんなことになってしまったのか――――

「殺し合いでもしに来たか、殺人鬼」
「…そうならさぞ楽しいだろうねぇ。でも今回はお茶を飲みに来ただけよ」
「早苗ェ!!なんでこいつ家に上げたの!!」
「え、だって諏訪子様のお知り合いだと言うもので…」
「知り合い？確かに知り合いだよ……敵としてな!!」
　諏訪子様は怒っていました。そりゃもう、昔カエルに悪戯をした時並みに怒っておりました。どうやら先程私が家に上げてしまったあの赤髪の女性が原因のようですが……私には皆目検討がつきません。
「冷たいなぁ。ほら、そんなに冷たいと冬眠しちゃうよ？」
「バカにしてる？」
　とても険悪な雰囲気でした。
　まさしく一触即発(片方)、いつ諏訪子様が力をお使いになるのか期待半分、畏れ半分で見ております。
「今更かな？単刀直入に言うと、この左目の呪い治してよ」
「やだね。それはミシャクジ様を怒らした祟り。あんたが悪い」
「だから頼んでるんじゃん。お願い」
「やだね。帰れクソ女」
　……あんな口調の諏訪子様は、初めて見ました。生まれた時からの１０年以上の付き合いですが、あんなに口の悪い諏訪子様は初めてです。新鮮で、逆に珍しく思ってしまいました。
　……不敬ですかね？
「あれからもう数えきれないぐらい時間経つけど、左目見えないのっ

て結構面倒なの！左の敵を殺せないじゃない!?」
「お前の事情なんて知るかぁ!?私をあんなに怒らせた癖におこがましい!!」
「このわからず屋！」
「それはお前だろ!?」
……言い争いはさらにヒートアップしていきます。勿論私はあの間に入り込むことなど無理なので端から傍観するしかありません。
あぁ……神奈子様が不在なのが悔やまれます…神奈子様ならば━━━
「ただいまー」
玄関から声が聞こえました。待ち望んでいた方の声が━━━
「…なにやってる、悪人」
「治しにもらいにきたのさ。大昔の遺恨をね」
「貴様は諏訪子にした仕打ちを覚えていないのか？もし覚えていながらその態度ならば、貴様は愚か者としか言いようがないぞ」
「大昔の事をちくちくと……そんなに嫌？」
「当たり前だ悪人」
ダメでした。むしろ三人に増えて煩さが上がってしまいました。
……あぁ、私は非力です…あそこに入り込める図太さか勇気あればこんなことには…
「あーもーいーかげんにしてくださーい!!」
……ありゃ、そうでした。私はあそこに入り込めるほど図太い人間でした。
「三人共わかってますよね!?絶対これは平行線だって！誰かが折れないと終わらないって！」
「ちょっ早苗？その通りだけどこれは…」
「諏訪子様も否定ばっかりで私には何が原因かサッパリです！せめて私にもわかるように話して下さい！」
私の大声が神社内に響き、やけに静かになりました。三人は私を見て硬直していて、次に動いたのは…

「……ぷ、あっははは!!この子凄い精神してるわ！神様二人と私の会話に堂々と入り込んで来た！」
　赤い髪の人は腹を抱えて笑いだしてしまいました。
　あんまり涙まで流して笑うので、私も少し顔が赤くなっているのが自分でもわかりました。
　……今さらあんな大声出したのが恥ずかしく…
「ひーっ可笑しいー。ねぇ、名前なんて言うの？」
「……早苗…ですけど」
「私は刀子、ただの刀子。
　――あぁもう、絶対治してもらおうと思ってたのに、こんなの見せられたら殺る気もなくなっちゃうわ」
　……今、字がおかしかった気がしますが私の気のせいでしょうか。いえ、言葉の上からならなにが変換しているのかなんてわかりませんが。
「よかったわね土着神、その子のお陰でスプラッタ回避よ」
「…いや、なんでお前が上なんだ」
　赤い髪の女性――刀子…さんは涙を拭いて、立ち上がった。
「今日は帰るわー…その子見てたら久々に娘にも会いたくなったし」
「だからさっさと帰れと――娘ェ!?」
　諏訪子様は酷く驚いておりました。
　……いや、あの人の見た目なら子供の一人ぐらいいそうなものですが…今はなき我が母もあれぐらいの年には私を産んでいたと聞きます。
「……早苗、一応言っとくけど、こいつは私達と同じかそれ以上の年齢よ」
　神奈子様がそう言って……えっ。じゃあこの人は人間じゃ…
「女は年齢ですら魅力なのよ。まぁ――殺されなくてよかったわね、とだけ」
　刀子さんは真偽から逃げるようにそそくさと神社から飛び出して行った。
　きちんと出したお茶と茶菓子は食べて行ってる辺りちゃっかりし

てるが。
「……嵐のような人ですね…」
「あいつの性質を考えると、むしろ凪のようだがね」
お二人方はどっと疲れたようで、さっきまでバリバリ出していた神様オーラを引っ込め、何時もの家スタイルに戻りました。
具体的には、寝転んでダラける。
「あいつまだ生きてるのかぁ……本当にしぶとい奴…」
「あの、さっきから気になってるのですが。というか聞いていたのですが、あの人は一体なんなのですか？」
今のところ二柱と仲がとんでもなく悪い赤髪の美人としか情報がありません。
目の前にで身内が見知らぬ人と喧嘩していたらそりゃ気になります。それも結構怨根の深そうな。
「あー…話したほうがいい？」
「えぇ、私、気になります」
「まぁいいんじゃない？どのみち昔のことだし、私ら二人の出会いの話でもあるじゃないか」
「成り行きだったけどね……そうだなぁ、簡単に言えば――」
諏訪子様はとても真剣な顔で。

――
「私の信者を全員殺した奴、かな」

――奇妙だ。と私が気付いた時には、既に事は進んでいた。
力が衰えている。
その事を理解した時には私の周りには誰も居なかった。
私とて馬鹿ではない。神の力が衰えるということは信仰が失われている、ということだ。つまり、私を信仰している連中が、村が、なにかしらあったということ。
病でも流行ったか、飢餓でも起こったか、別の神が信仰を奪いに来たのか。原因は様々に思い浮かぶが、こうパッタリと信仰が無くなるのはおかしい。上のどれかならば、減るとしても多少は残る筈だ。
つまり、私が想定していない事態ということだ。
その事を巫女に伝え、村の様子を見てきてもらう。それが今打てる最善。私に解決出来ることならば、解決しよう。それが信仰にも繋がる。
「遅いなぁ…」
しかし待てども巫女は帰ってこない。既に夕刻、もうじき日が消える。
「しょうがない、あんまりやりたくはないけど……分身を……ん？」
最終手段を取ろうとした私の視界に見知った人影が映った。私の社の巫女にして、村人と私と繋ぐ代弁者である少女だ。
「遅いよー、なにしてたの……？」
待ちかねた。と言わんばかりに声を掛ける私だったが、巫女の様子に疑問を感じた。社に近付いて来てはいるが、何時もより歩くのが遅い。神である私から動くわけにもいかないので、巫女が社に辿り着くのを待っているが……やはり遅い。
「どうした怪我でも…」
ようやく私の前に来た巫女にその答えを聞こうとしていて、私は『油断』していた。
そして、遠からず近しい仲である巫女が発した言葉で、私は警戒を思い出した。
「お逃げ下さ……」

『巫女の首が飛ぶと同時に、私の首にも刃が当てられていた』

「!?」

警戒はしていた。巫女がやけにボロボロな状態でお逃げ…と言った辺りで警戒した。しかし、相手はやり手だった。

油断よりもさらに隙の大きくなる瞬間――つまり、油断が警戒へと切り替わる一瞬で、相手は私に攻撃を仕掛けた。

敵は巫女の後ろに張り付いて巫女の体を動かしていたのだ、気配を消して、ギリギリまで殺気を感じさせず、最大の油断と警戒をさせてから攻撃を行った。

「くぅ…っ!?」

やり手だと言わざるを得ない。神である私が咄嗟に腕を一本捨ててしまうほどに、敵の不意討ちは見事だった。

そして理解する。私の信仰が減っていたのは目の前の敵の――!!?

「な…に…?」

私は膝をついた。あり得ない、この私がたかが腕一本だけでここまで消耗するなど……

「不意討ち失敗。けどまぁ、あの村の奴ら皆殺しにしたから、力出ないでしょ?」

やはりか――っ。原因はこいつだ。まさか私を殺すためだけに民衆まで殺すとは……一体どこの馬鹿げた神の仕業だと言うのか…!

「神?残念ながらこれは人災よ、私が一人でやったこと。あの人間達?残念ながらあれは私の趣味よ、時間はわりと掛かったけれど…別にあいつら殺さなくたって私はあんたを殺しにきてた」

私は絶句した。こいつは今何と言った。我欲で人を…百を越える人を殺したというのか。

私は激怒した。こんな馬鹿の為に私の信者が死んだと知って、久しく本当の怒りを覚えた。

「許さない、許さない、許さない、許さない…!!」
呪詛のように呟く。事実それは呪詛のごとき怨み言。
我は祟り神、ミシャクジの統一者。
土着神の頂点……洩矢諏訪子！
「んー…？」
奴に祟りを！
奴を殺す祟りを！
未来永劫、来世まで消えぬ祟りをッ!!
「なんか嫌な感じ…ね！」
心の臓を貫かれた。……だからなんだと言う。
奴への怨みは、怒りは、この程度で消えたりしない。
奴の表情が歪んだ。私がまだ死んでないことに憤りでも感じたか。
笑みが浮かぶわ。
「チッ…!?」
私は最大の怨みと怒りを込めて、目の前の怨敵を祟る。
白い巨蛇の群れが、奴へと襲いかかった。
「なにこれ…」
刃物なぞ、通るわけもない。
これは怨み、怒り。切れるものではない。
「がっ…あぁぁぁぁぁッッッッ!!!?」
巨蛇に体を貫かれ――――といっても腹に穴が空いたわけではないが。奴は悶え苦しんでいる、ミシャクジの祟りで。
「こ…の……ぐぁッ……死……私…が…」
目の前でバタバタと暴れる女…奴はもうすぐ死ぬだろう。信仰は減って弱まったとはいえ、祟り神が全力で祟ったのだ。同じ神でも只では済むまい。
しかし……私はある一点を見ていた。こんな状況になっても手放そうとしない奴の持った刃物。アレから発される何か得体の知れない力。おそらく私の消耗は信仰によるものだけではない、あの刃物に切られたのもある。…あくまで予想だが。
「――――――」

……やがて奴の動きは止まった。気配を感じても、生気はない。
死んだか…。
しかし、此方の被害も甚大だ。信者と巫女は死に、私も半死半生。
……復興にどれだけ掛かるかわからない。そもそも早急に信仰を得なければ存在その物が――――

ドクン

私は振り返って凝視した、死に絶えた筈の奴の体を。
「……とんでもない祟りね」
声が……こえ…が……
「私は不死身、不死の体。死んでから蘇るタイプのね。……しかしヤバいねこれ、蘇ったのに残ってる。左目が見えないや」
奴は左目を押さえながら立ち上がった。
……馬鹿な、あり得ない、嘘だ。私の祟りは生半可な不死など簡単に葬る、つまり奴は神にも匹敵する不死性を……
「本来の力なら蘇っても全身祟られたままだったのかな?だとしたら弱体化させといて正解だったわけか…危ない危ない」
刃物の存在を確かめるように振る。…イメージは私の首か。
「さてと…」
奴が改めて此方を向いた。
…私も年貢の納め時か、まさかこんな終わりとは考えもしなかった。…それが油断か、それが侮りか。それを見事突かれてしまったわけだ。涙も恐怖もしない。こんな体たらくだが、私は神だから。
「じゃあ、殺しちゃ――――」
首に振られるであろう凶刃を見ていた視界は、次の瞬間には横へ吹き飛ぶ奴に変わっていた。
……なにが起きた。
「……最近力を増しているという洩矢神を取り入れようと遠路遥々来てみればなんだこれは。人は居らず、肝心の神が死にかけているとは」

目の前には、神がいた。
後ろに神々を控えさせながらも大きく、存在感を放ち続ける。弱体化前の私と同じかそれ以上の力を感じさせる存在が。
「ふむ……今吹き飛ばした悪人一人の仕業だと思うが…いやはや、恐ろしいものだな」
……その御柱には見覚えがあった。大和の神が一柱、八坂神だ。まだ神としては若いながらも、その力を存分に奮って力を増していると聞く。
…何故こんな時に。
「お前の国を攻めるつもりでやって来た。と言ったらいいか洩矢神よ」
「……」
「と言っても、もう攻める場所などなかったが」
……なんだろうか。状況が状況だけに仕方ないのだが、やけに上から目線な神だ。消えていた筈の怒りが少し再燃するぐらいには。
「さて…ふむ。このまま領土を奪い取ることは容易い、しかしだ、しかし…」
…八坂神はなにかを考えている。
……奴はどうなったのだろうか、御柱に潰されていたが、再生でもしているのか。
「うむ…そうだな、洩矢神よ。お前の力をこのまま消すのは惜しい、私の下に降りよ。さすれば、消えかけのお前の力もある程度だが復活する」
「……そりゃ、ありがたい提案だ八坂神よ。しかし、私は見ての通りの虫の息、こんな神を取り込んだところで大した力になるまい」
「なに。残っているなら力などどうにでもなる。私は、お前の力が消えるのが惜しいと言っている、早く決めるといい」
…上から目線だが、提案は非常にありがたかった。このまま消えるぐらいなら、軍門に降りるのも仕方ない。
要するに、命か、意志か。
……まぁ、死にたくないと言えば本当だ。あれの下は癪だけど、な

にもできずに無くなるよりは、全然マシ。
　それに、私にはもうなにもないから。
「…は、はは。こんな、なにもない奴でいいなら自由にしろ。どうせこのままなら消える身だ」
「うむ、英断だ。約束しよう、八坂神の名に置いてお前に嫌な思いさせん」
　そりゃありがたいことで。
「では……――まだやるか悪人よ」
　八坂神の覆う気配が変わった。先程は接待、これからは戦闘と言ったところか。
「……全く、急に出て来て人のこと潰しといて…」
　御柱によって抉られた地面から、ゆっくりと奴は姿を現した。……やはりとてつもない再生能力だ。
「まだやるならこの八坂神が相手になろう。貴様が死んだ回数を忘れるほど、潰してやろう」
「こわいこわい……まぁ、全開の神様の恐ろしさは身に染みてわかったし…今回は手を引くよ。本当は身を焼くぐらい殺したいけどネ」
　奴は言いたいことだけ言ってそそくさと逃げ出した。
　……あの嵐のような女は、私に深い傷を与えて消えた。
「…次会うことがあれば、容赦はせんさ。――よし、じゃあ洩矢神よ」
「なんだ八坂神」
「一先ず……酒といこう。話はそれからでも遅くはない」
　……大和の神はなにかあれば酒と聞いていたが…本当だった。
　いや別に嫌いじゃないけどね、酒。

ナイフがあれば交渉も出来る。

――――人の感情とは不可思議な物だ。

人を人足らしめる存在でありながら、理屈としては最も邪魔な存在でもある。理解しているとも。疑問を持つこと自体が感情によるものだと。

悲しむことが、怒ることが、悩むことが、恋することが。人のあらゆる行動原理が感情から来るものだと。

私は裂けた空間の先で、男に蹂躙される女を見て思った。

私とて感情はあるだろう。思考しなければ感情など生まれまい。男から感じる感情は怒りだが、私の場合は好奇心。女から感じる感情は……さて。

人によって物事に対する感情は違う。

男は妻と子を殺され怒りを覚えた。人によっては悲しみもあるだろう、はたまた歓喜もあるかもしれない。今回は怒りの感情、その結果がこれだ。男は妻と子を殺したであろう女を殴り、蹴り、締め上げ。怒りのままに女を蹂躙する。

女は数分前より既にピクリとも動かない。それでも男は蹂躙を止めない。

人の感情の先々はこんな結末だ。常識を少しでも越えてしまった感情はその人に、周りに被害を振り撒く。

自滅と破滅。

その二つの言葉が頭をよぎる。

この後男はどう動くだろうか。女の遺体を隠して証拠隠滅か、殺した重さに耐えきれず狂乱か、はたまた自暴自棄になって自殺でもするか。疑問は尽きない。

動いた。焦燥を感じる表情で辺りを見渡している、人が居ないかの確認。自殺という線はなくなったか。

さてどう――――おや、そのまま逃げ出したか。まぁ、証拠隠滅なんてせずとも女一人の死体を見たところで人か妖怪の仕業なのかなんてわかる筈もないか。見ていた私以外は。

「ごきげんよう」
　驚いてる驚いてる。
　男は突然現れた私を驚愕の表情で見ている。感情豊かなら表情も豊かだ。おそらく男は先程のことがバレてないかの心配しかしていないのだろう。自分の身の心配なんて微塵もしていない。
「あ、あぁ。ごきげんようお嬢さん…こんな時間にどうしてこんな場所に？危ないから早く帰った方がいいよ」
　おや意外、冷静に相手を見る余裕はあるのか、それとも人を殺しておいてまだ人としての営みを送ろうと言うのか。そういうことなら目の前に現れた方が妖怪感とサプライズ感はあったか。しかしいかんせん夜、それも人も通らない場所。サプライズするには些か暗い。妖怪感は増し増しだろうけれど。
「ご親切にどうも。通りすがりなので、直ぐに離れますわ」
　そうやって背中を向ける私。男が安堵の息を吐いたことが見なくてもわかる。
　人を弄ぶ、なんてことはこういう立場になってから久しくしていないが、やはり私も妖怪ということか。性根悪く楽しいと感じている。
「――――――あぁ、そうだ。その奥の死体は隠さなくて結構？」
　男の呼吸が止まった。全く……愚かしいことこの上ない。
「ッ…!!」
　そして罪を隠す為にまた殺しに走る。一度殺しをした人はこうも簡単に制御が外れる。
　私へ向かってくる男を見て思う。
　人を見た目で判断するなと言う。事実男は女に騙され家族を殺されたし、今現在も私の正体を知らぬまま向かってくる。
　まぁ、勘違い、というやつだ。
「それと…後ろ、注意なさってね」
「なっ……が……ぁ……」
　男の胸から刃物が飛び出る。
　あとは…そうだなぁ……目を付けられた相手が悪かったか。
「散々私のこと痛みつけておいて、殺さずに逃げるなんて……このへ

タレさん？」
　胸から突き出たナイフはそのまま上に動いて男の上半身を真っ二つにし、男はなにかを言う前に息絶えた
　女にとって相手の事情など関係ない、男が自分にどんな理由を持って襲っていたかなど知りもしない、どうでもいい。男の妻や子はそこにいたから殺し、男は襲ってきたから快楽ついでに殺した。
　女にとっては殺せるか殺せないか。それだけ。
「……あんまり気持ちよくなかったな、やっぱり殴られるよりぶっ刺すのに限……ん―？…誰あんた」
　女は私のことは知らないだろう、知っているのは私が一方的なのだから。…いや、一部での話だがこの女のことを知らない者はいない、別に知っているのは私限定という話ではない。
　女は私に話しかけながらも、ナイフは何時でも振れる位置にある。それでいて殺気を感じさせない。見るのは数回目だが、それでもこの卓越した気配を隠す技術に素直に感心する。
　この女の驚異の一つだ。女と警戒もなしに相対した者は、このナイフの存在を悟らせない技術の前に気がつけばナイフを突き立てられ、死んでいる。…いや、悟らせない、というよりは他に意識を誘導している、とでもいうのか。『ミスディレクション』という技術に近いものを感じる。
「私の名前は八雲紫。貴女が刀子、で合っているかしら」
「そうよ、私は刀子、ただの刀子。紫さん？と言ったかしら、結局はなんの用で私の前に現れたわけ？」
　そうね、ごもっともなご意見。その『普通の人が普通に思うような意見』を口ずさみながらナイフを私へ突き立てている――――という点を除けばだが。
「チッ」
　……さてまぁ、自分の能力を使って凶刃を避けたのはいいものの。警戒していたのに本当に少しでも隙を作っていれば刺されていた、と確信出来るのが彼女の怖いところだ。この私も表情こそ変えないが、内心冷や汗が止まらないとここだけで言っておこう。

しかし、私は目的を達成する為に彼女に向き合わないといけない。彼女を、敵か、味方か、判別しなければならない。障害にさせない為に、邪魔をさせない為に。
『まだ』敵対するつもりはありません。貴女の返答次第、ですが」
「……それ、悪趣味ね。持ち主のセンスがよくわかるわ」
「それはどうも。貴女のその獲物もいいセンスでしてよ？」
「…チッ」
彼女は悪態と舌打ちを隠そうとしないし、会話を遮ったことを言及すら様子もない。当たり前だ、彼女のあらゆる行動は全て相手を殺すことに繋がるのだから。
会話をするのは注意を逸らすため
挑発するのは隙を作らせるため
身ぶり手振りが大きいのは自分の印象を小物にするため
…だから、自分をジッと見つめて警戒を解かない私はとても鬱陶しいだろう。彼女だって万能ではない、彼女の強みはその技術と身体能力、それを活かせない状況ならば、彼女とて甘んじるしかない。それでも瞬き一つすら危うい状況なのは変わらないが。
「私は楽園を作る。その為には、貴女という存在は邪魔。言いたいことがわかって？」
「…へぇ、変人かと思ったら狂人だったか。急に現れて人のことを邪魔者扱い、それに理由が楽園作りぃ？頭おかしいんじゃないの？」
わりと結構言われた。確かに常人の発想ではないと自覚しているが、頭おかしいは貴女には言われたくはなかった。
「それもそうだ。でも、正直邪魔者扱いは頭にキタかも。殺されても文句ないわよね？」
「言ったでしょう、『まだ』敵対しないと。貴女は確かに邪魔者ですが、その分『有効活用』できると思っています。どうでしょう、大人しく私と協力関係に――――」
「死ね」
「おっと危ない」
全く、会話の最中に切りかかるのは止めて貰いたい。

なんて、自分が話してた内容を読み直せば彼女の怒りもごもっともなんだけど。
……おや、もしかして私が特に理由もなく彼女を馬鹿にしていると？
まぁ、彼女に対する憤りがないと言えばないこともないが…だけどそれをこの状況で優先させるほど私は愚かではない。これは…単に彼女を見極めているだけ。
おや？それも上から目線か。全く理由にならないな。
「……」
彼女もそれに気付いたのか、はたまた気付いていたのか。
「…はぁ、全く…なんの意味もない。私のことを知りたいなら問答なんて意味がない。殺しに来なさいよ、そしたら私も殺してあげるから」
話は支離滅裂だ。二言目には殺す。彼女はそういう存在だと理解はしているが、それでもやはりその殺意や欲求には驚愕を覚える。
そんな存在がいるのだと。私も理解するまでは信じていなかった。
「…いや、あんた、知ってるのね。私のことを『知っているのね』。だからこんな風に接することができるのね」
そこまで言って、突然彼女は横にあった木に拳を叩きつけた。
「腹立たしいッ!!他人にそこまで知られていることに腹が立つッ！私のことは私だけが知っていればいいのにッ！」
彼女は激昂していた。
先程の作られた怒りではない。正真正銘、心からの感情だった。
『怒り』、私が最初に見た彼女の純粋な感情だった。…中身までは純粋とは限らないのだが。
「どこで知ったのかは知らない、どうやって知ったのかも知らない。けれど、それを知ってるあんたは殺す。殺してやる
たとえ、何度繰り返そうとも」
彼女の表情は何時しか消えていた。

「最近は、めっきり大人しくなったわね」
　私が声を掛けた彼女は、積み立てられた妖怪の死体の山の上に居た。見慣れた光景、今となっては見慣れ過ぎてある種の芸術にも見えてきたものだ。
　……そう式に言ったら、『病気ですね』と返ってきたものだが。
「そう見える？ケケケ…最近娘や親友に会うから忙しいのかもね」
「えぇほんと…あの時もそれぐらい大人しかったら私も幾分やりやすかったでしょうに」
　ふと、あの時のことを口にだした。私にとっても彼女にとっても、決してよくはないと言えるあの時のことを。
「……あれの話は他の誰にも一切しない。したらあんたを私が殺す、それまではあなたに従う。その『約束』、忘れてないでしょうね」
「勿論。私以外に知る者がいたとしても、それは私が言った訳ではない。それに、私がもしもその類いの話をしたら貴女にわかるようになってる『約束』、ですものね。嘘はつけませんわ」
　そうだ。あの『約束』は絶対だ。私にとっての枷で、彼女にとっての鎖だ。それを違えることなど出来る筈もなく、もっと言えば義務感などと言った物では断じてない。
　これは私にとっての重り、文字通りの枷、本来は真っ先に邪魔になる物で、棄てるべきものだ。…それを、今もこうして律儀に守っているのは……
「…いいのよ、そんなに改まらなくて。私と貴女は雇い主と雇われ者だけど、その上で友人でしょう。私は貴女を信頼してるのよ紫、誰でもない、この私が」

「――――ええ、本当に、貴女でなければ、私ももっと楽だったのだけど」
――――彼女ともっとこうしていたい。
なんて、私が想っているのはその程度のこと。だけどそれは、彼女との縁を切らない理由にはとてもとても充分なことだった。
それこそ不可思議だと自分で言っていた感情であるなんて、私が気付いてないわけなかったけれど。
「…そう、お互い様ね。安心したわ」
彼女は安堵した表情を見せた。
「でも、本当に忘れないでね。その時は、私は貴女の敵だから」
……そう。その表情を見ても私は忘れない、忘れてはならない。彼女のことを友人として想っていても、彼女のことをとても大事に想っていても。
彼女の危険性はいずれ私の首を掻くかもしれないこと。
彼女はその殺意を隠して生きていること。
彼女の存在はこの世界にとってバグであること。
「忘れないわ。永遠に」
それが、彼女と共にいる資格。結局のところ、どう行っても彼女の根本的な部分は結局のところ殺すことなのだと、自覚して、忘れないで、覚えていること。
それを誓っているから、私達は友人でいられる。
「ケケ…大袈裟なんだから……じゃ、そろそろ仕事の内容聞こうか？どうせあるんでしょ？」
友人、雇い主。
私は彼女へ仕事を与える、それが彼女を縛る条件、私が彼女を殺さない為の理由。言い訳。
……元々はそういう話だった。今は…どうだろうか。
「ええ。ちょっと…外の世界へ行ってもらいたくて」
そんな私の内心を、彼女がどこまで理解しているかは流石の私でもわからない。ただ、嘘でも彼女が友人として居てくれるなら――――私もそうしよう。

「外の世界…ね、久々だ、あの時以来か。……それじゃ、詳しく話を聞きたいし…久しぶりに二人で飲みに行こっか」
なんて、きっと私だけが思ってる。
「勿論、喜んで。リードして下さいます？」
「レディファースト…って言っても、女二人じゃ優先もないか」
ケケケと笑って、彼女は死体の山から降りた。

「……」
「…わかっていた筈だけど」
私は、目の前で満身創痍で倒れる彼女を見下していた。
「貴女では真正面から私に勝つことも、殺すことも出来ないと」
彼女の体は左腕が消え、両足も折れ、外面からはわからないが内部も損傷しているだろう。それほどの状態だ。
これも全て、彼女が私へ襲い掛かってきた結果。
彼女は驚異だ、その殺意と、その殺意を実行するだけの技術も武器も持っている。しかし、それまで。多少身体能力が高いと言っても、所詮は人間より少し高い程度。下級妖怪には勝てても、私のような強力な妖怪や神には不意を突かないと勝てない。不死身の体も驚異だが、それは誤差だ。多少なり傷を負うことはあろうとも、それを理由に負けるほど私は盲目していない。

……それを、彼女はわかっていたように見えるけれど。
「貴女の正体を知っていることがタブーに触れていたのか。あるいは、それすら相手を殺すためのフェイクなのか。どちらにしても、貴女では私に勝てない」
「う…っさい…わね……そんな…こと…百も…承知…なの…よ」
でも、殺さないといけない。それだけは、それを知っているのならば、私という存在を掛けて殺さないといけない。
彼女はそう言った。
「…貴女の能力があれば、傷も治せるでしょう。まずは傷を治して、それからまた話を…」
「これは…死なな…いと…発動…して…くれない…の…ケケ…ケ。だから…一度…死なせてよ…」
「そう」
彼女は笑っている。だけど、その殺意は消えることなく私へ突き刺さっている。
怖い。恐い。
純粋な殺意に恐怖を抱いたのはいつぶりだろう。こんな状態になりながらも人を殺そうとしている存在。恐怖だ、恐怖を感じざるを得ない。
「貴女が死なないのはわかってる、だから…封印という形をとらせてもらうわ」
私では彼女を殺せない。倒すことは出来ても、滅することは出来ない。
だから封じる、古来からの伝統…倒せない存在は封じてしまう。私もそれを行う、簡単だ。こんな手負いを封じれないほど私は弱くはない。
「ケケ…ケ…封じる、この私をか……」
彼女は動かない体を揺らしながら、私を見上げた。
その眼は、とても綺麗な赤色だった。
「貴女は、私を知っている……私がどんな存在か、知っている……そうだったら、そうならば…」

うわ言のように呟いて彼女は唯一動く右腕を私へ向けてきた。
……理解している、理解しているとも。彼女の行動は全ては殺しに直結していると、だから、この行動も警戒しなければならない。
警戒して、腕を切り落として、目を潰して、そして封印するべきだ。
……ただ、それだけなのに。
「何故……？」
出来ない。
しなくてはならないのに、出来ない。
何故、何故何故何故何故何故何故なぜ？
わからない、わからないわからないわからない。
ど　うして　体が　動か　な　い
「……貴女が、趣味の悪いヘンナノに…私の分身を投げ入れたから…仕方なく…別のを使った…けれど…そっちは…毒が塗ってあったのよ……こんなありきたりなの、思いつかなかった…？」
油断……？いや、油断はしていなかった……強いて言うならミスだ、あのナイフを恐怖して、遠ざけてしまったことがミスだ。あのナイフは殺傷力はとんでもないが、急所に当たらなければ問題ない。
しかし…それでも数多の生物を殺したあのナイフには最大の警戒を持って対処した。してしまった。
「流石、永琳…の作った毒……あぁ、勿論、私は解毒剤を持ってるわ…私は、だけど」
私は思わず膝をつく。呼吸が荒い、体が熱い、能力を上手く使えない。
しくじった…ッ
そう考えて歯噛みした時に、彼女が話しかけてきた。
「取引、しましょう」
それは、先程私が言っていた内容と似ていた。
「協力関係、いいじゃない……互いに動けず、けれど貴女を私は助けられる。このまま硬直するのもいいけれど……そうなれば、不死の私が有利ね。なに、簡単なことよ、私が貴女の言うことを達成しましょう。殺しの仕事なら、やったげる。その代わり…」

今度は私が彼女を見上げた。
「私のこと…誰にも話さないでね」
赤い髪と歪んだ笑み。
まるでそれは、悪魔との取引だった。

ナイフがあれば教訓を教えられる。

生涯忘れないだろう――――なんて言うと物語でよくある月並みの言葉だが、彼女に対しては案外ピッタリな言葉ではないか、と思う。それほどまでに、彼女という存在は決して忘れることがないほど強烈だ、と断言できる。

その存在感は、ある意味、どんな存在よりも印象に残った。

その殺意、技術、被害はどれを取っても凄まじい。

一目見ても彼女に警戒出来ない。警戒していても解かれる。追い詰めたと思っても次の瞬間には首を跳ねられた。

なんてよく聞く話だ。その悪名高さは、ある意味神様の如く畏れられている……。

ここまで建前。

本音を言えば、結局のところ彼女という存在は、少し殺意が大きくて、ちょっと他より生き物を殺しただけの、そんな他と対して変わらない存在なのだと思う。

それはまぁ、私だから思うことなのだろうけれど、想うことなんだけど。彼女のキャラクター性は確かに常軌を逸脱しているが、それまで。飛び抜けた強さがあるわけでもなく、底で這うような弱さがあるわけでもない。

あるのはただ、殺意とちょっとの殺しのスパイス。

彼女という存在を表すならきっとそうなってしまう、一行で終わってしまう、完結してしまう。

ならば彼女の人生とは一体なんの意味があるのか。

彼女の人生に意味を求めて物語として見る輩でも居るのか。だとすればこの物語はどんな物語なのだろうか。

彼女の生き様を見る物語か？

彼女の死に際を眺める物語か？

彼女という存在を知る為の物語か？

彼女という危険を教える為の物語か？

それとも…本当に意味もなく、彼女の人生を観覧する物語なのか。

こんな話がある。
自分が生きていると思っていた人の人生は、実は人形が動かされていたモノだという話。人生というのは予め作られたモノで、自分の意思で動いていると思っていたモノは人形劇のように糸で動いていただけ。
その人はそれを知らずに死んでいく。
自分が作られたモノだとは微塵も疑わず、一生を生きた気でいて、満足した気で動かなくなる。
ただ単に、人形劇が終わりを告げただけなのに。
……。そう、彼女もだ。
伝承で伝えられる訳でもなく、神や邪神になったりもしない。ただ、見られるだけ。彼女が生きてきた人生を、その一生を見るだけ。
それは彼女にとってどれ程のことなのだろうか。彼女の物語は、彼女にとってどれだけの物なのだろうか。
あるいは、この物語を見る者にとってはどれ程の物語なのだろうか。
観覧されるだけの物語。それはなんというか、操り人形のような気がして。
きっと他の人は違うのだろう。
そもそも、普通はこんなこと自体思わないし、考えないんだろう。物語がなんだとかとは私は言うが、結局のところ本当に見られてる訳もなく。単なる被害妄想もいいところなのだとは、流石の私も理解していた。
現実は事実しか映さない。
だがもしも、仮にも、本当に見ている者がいるとしたら、動かしている者がいるならば、そういう神様なんかがいるのかもしれない。
それこそどうでもいいが。
……。彼女は、どうなのか。
長々と語ってはいるが、彼女に対しての感想はつまるところ私個人からの一印象でしかなく、彼女のことを全て知っている訳でもない私の感想なんて、食べたことない料理の味の感想を言う奴並みに意味が

なくて。
……。
そもそも私は口数は少ない方だとよく言われる。知り合いの魔法使いにも、何考えてるかわからない。と前に一度言われたことがある。
違うのよ。
私は口数が少ないのではなく、頭の中で色々考えた結果口に出すのが面倒になるだけ。それだけ。全く関係ないことから確信をつくことまで、色々考えている。でも、それを口に出さないのも人間というものだ。それは私でも共通している。
……それでも、一人頭の中で完結してしまう私でも、彼女のことを語りたいと思った。その事実だけは覆しようのない本当の本心だ。
まぁ、彼女のことを知っていて尚且つ話せる奴なんて両手で足りるぐらい少ないだろうが。
……いや、悪名に限ってはそうではないか。
……。
前置きが長くなったが、それはともかく。
殺意が人より少し強くて、人よりちょっとだけ生き物を多く殺した彼女。
だけど。
私にとっては無二の存在だった。
そう私、博麗霊夢は思う。……最初からこれが言いたかっただけなのよ。本当よ？

「あら、いらっしゃい。刀子さん」
「いらっしゃったわ。霊夢」
彼女はいつしかそこに居る。目を離した…というか、気付いたら…というか。ともかく、気が付いたら現れているのだ。
ずっと。
昔から。
ちなみに今日は縁側でお茶飲んでたら目の前に居た。酷い時は風呂に現れるので今日はマシな方だ。
「今日のご飯は何かしら」
「ウチは人にタダ飯を食わせられる程備蓄があるわけじゃないわよ」
「あら厳しい。猪を『か』ってきたからこれでどうかしら」
はたしてその『か』るはどんな字なのか。
買って、勝って、飼って、駆って、狩って。
絶対最後の奴だろうけど。
思考するまでもない。
「はいはい…どうぞ、お上がり下さい」
「お邪魔するわね……あぁそうだ、忘れてた」
縁側から神社に入って来た彼女は、居間の中心で此方へ振り返って、ふと思い出したように言った。
「はっぴーばーすでー、霊夢」
それは彼女しか知らない事。私だってうろ覚えだが、彼女だけは知っている。だから言うが……。
私は別に今日の日付に生まれた訳ではない。それだけは真実だ。
「…それ、毎回言うの？」
「いいじゃない、お誕生日。早く歳を取るのは良いことだわ。大人になれば、世界が変わるわよ？」
それは良い意味なのか悪い意味なのか。
……とまぁ、この通り。彼女は私と会う度『はっぴーばーすでー』を祝う。何故かは知らないし興味もないが……、本当の誕生日も知っているのだから、キチンとその時に言って欲しいものだ。

でもまぁ、本当の誕生日らしき日にはちゃんと真剣にお祝いするのだが。それでも紛らわしいことは紛らわしい、最初の頃は言われる度に驚いて仕方なかったものだ。
「大人なんて、陸なのいないわ」
「そうね。だからアナタは、陸なのになりなさいな」
「なれるの？」
「なれるわ。アナタならね」
このやり取りも繰り返すこと９４回目。
きっかけは覚えていない。時々思い出したように私から言い出すお約束みたいなものだ。
「でも私は…」
でも、さっきまで色々考えていたからだろうか。いつもはそこで終わるやり取りは、初めてその続きを綴った。
今日の私はちょっと弱気だったのかもしれない。ささいな理由だった。
「でも私は、博麗の巫女。そもそもこんな立場な時点で陸なのじゃないわ」
「……」
「人間代表。大層な名前だわ、でも、それはどれだけの物を捨てればいいの。大人になる頃には私は私で居られるの」
「……」
「大人になんてなりたくない。大人になって心まで死ぬぐらいなら、ずっと子供でいい」
それは我が儘とも見える。我ながら本当に子供みたいな我が儘だった。
「……」
「どうなの。刀子さんは私なんかよりずっと永く生きてる。所詮は子供の戯れ言だと思う？まだ２０も生きてないような若造にそんなこと言われたくな――――」
コツン
「え？」

一瞬、何をされたかわからなかった。
「隙だらけよ、霊夢」
口を三日月に歪ませて、刀子さんは私の額を小突いた左手を自分の方へ戻した。
……。
お得意の意識ずらしだろうか、何度見てもとんでもない。物事起こされるまで気づかない。それがどれだけ脅威なの――――いや、そんな話をしていたのではない。
それまで意識ずらしするな。
「そんな話をして――――」
「確かに大人は陸でもない、博麗の巫女もこんな女の子一人に人間代表なんてさせてる時点でどうかと思う。紫の考えなんて私にはわからないもの、私には人並みの感想しか出てこないわ。こんな奴でもね」
こんな奴。と自分のことを指す時、刀子さんの表情は少し悲しそうになる。
多分、私だけしか知らない。
「私は永く生きてきた、死んできたとも言うわ。その中で、糞みたいな奴もいたし、高尚な奴もいた。私は相手の事なんかこれっぽっちも考えないけれど、その人格まで否定はしてないわ。
人を見て助けたいと思う奴もいれば、殺したいと思う奴もいる。
妖怪は恐ろしいけど、人間はもっと恐ろしいわ。それを殺して回る私はもっと恐ろしいのかもしれないけれど」
……こんなに話す刀子さんは久しぶりだ。なんて場違いな考えが思い浮かぶけれど、私の体は聞き入っていた。
ずっと生きてきた人外の言葉を。
「でもね、何度でも言うわ。アナタは違う、アナタは必ずなれる、自分が望んだ人になれる。
途中、死にたくなることもあるでしょう。壊したくなることもあるでしょう。
でもいいの、それは人として当然のこと。そう思ってしまうのは人

ならば絶対ある。
アナタは他の人とは少し違うけど、その当然を当然として受けいられないのかもしれないけど。
でもきっと最後はこう言うわ
『やってられないわね』
そう言ってお茶を飲むわ」
まるで、私のことを知っているような口振りだった。
私のことを、理解しているような言葉だった。
私のことを……。
「どうして、そんなことが言えるの……」
「……さてね。でも私は、それがわかってるからアナタとこうして話し合う。永琳とだってこうはならないわ」
「……」
「まずは生きなさい、霊夢。そうすれば、わかるわ」
生きてきた人の言葉。
それは思った以上に重く、強く。そして何より、私が求めてた答えだったのかもしれない。
……結局は私も子供で、大人から諭されたみたいな構図になったわけだ。
でも私は知っていた、そんなこと言う刀子さんが一番子供みたいな人だと。大人はやっぱりズルい。
「じゃ、ご飯にしましょうか」
まぁ、そのズルさすら武器にするのが刀子さんなのかもしれないが。

「今日はあの人いないんだな」
「どの人よ」
「あのおっかない人」
「……刀子さんならここ最近来てないわよ」
私の隣に座る白黒の魔法使い――魔理沙。
私と語り合える数少ない存在だが…その話題は少しタイムリー過ぎたかもしれない。…まぁ、その理由を話すのは少し後になるかもだが。
「刀子さんは仕事」
「へぇ、仕事ねぇ」
やけに煮え食わない魔理沙の態度。
お茶だけ減っていく。
「言いたいことあるなら言いなさい」
そういう態度は残念ながら私のお気に召すところではない。
むしろ、イライラする。
……こういう所が喧嘩早いと言われる由縁なのは、流石の私も気づいていた。まぁ人間、性格なんてわりと変わらないものだ。意識しなければ。
……そんなことに気付けたのも一重に刀子さんという存在が居たからなんだろうが。だからこそ、刀子さんの話題でこんな態度を取る魔理沙に少し過剰に反応してしまったのかもしれなかった。
「いやなに、最近妙な噂話を耳にしてな？」
「噂話？怪談でも流行ってるの？」
「何故噂話と聞いて真っ先に出るのが怪談なのかは小一時間程問い詰めたいところだが、違うぜ」
「……」
「いやわかってるだろ？今の話の流れ的に」
「…刀子さんの噂話なんて古今東西どこでも聞くわ。英雄譚から悪事

まで、そりゃまぁ色々と」
「……まぁ直接関係あるかはわかんないんだがな。妖怪の斬殺死体が無数に発見されたと、それを聞いて思い浮かんだのがあの人だったんだが……その様子だとしょっちゅうのことらしいな…」
その通りだった。
刀子さんは人から頼まれたり、自分の快楽の為に頻繁に生き物を殺してる。……八割方自分の快楽だが。
だからこそ、そんな噂話は「またあの人か」で終わってしまうものだった。…強いて言うなら確かに最近はそんな噂話は聞かなかったな、とは思う。刀子さんがいる以上、どこかで聞いてもおかしくはなかったと思うが、ここ半年は確かに聞かなかった。
言うなれば、久々、ということか。
「…あぁ、確かにわりと頻繁に聞いてたなぁ……単に休憩期間とかだったんだろうか……」
ぶつぶつ煩い魔法使いは無視して、私はお茶を一口。

…勘だが、とても嫌な予感がした。
さっきまでは微塵も仕事していなかった私の第六感が、一瞬警報を鳴らした。そして、その警報が意味することは、今までの経験でよく知っていた。
『異変』
幻想郷で度々起こる災害。小さいことから、幻想郷その物を壊しかねない大きいことまで様々あるが……今回のそれはその何処にも属さない「嫌な予感」だった。
言ってしまえば、よくわからない。わからない。
「……」
…ちなみにだが、勘で異変を察知するなんて普通はバカげてるとは私も思う。だが、博麗の巫女は人間の代表として、そういうことがあらかじめわかるようになっているのか、それに関しては私はわからないけれど、こと異変に関しては凄まじい予知能力を発揮するようになっている。

紫ならなにか知っているのかもしれないが、聞く気もないし興味もない。
少し、話が逸れた。
「……」
「…おーい、霊夢？」
……刀子さんの話題の中で起きた予感ならば、ほぼ間違いなく刀子さんはその異変に関わっているのだろうと予想がつく。便利な第六感なのだ。
…さぁ、さっき言ったタイムリーの意味。そろそろ明かすとしよう。
「…刀子さんは最近仕事で来ない。でも、私は刀子さんが何をしているか知ってるの」
「ん？そうなのか？でもお前さっきの噂話の件、全く知らなかったじゃないか」
「刀子さんの殺しは日常茶飯事。私は『噂話』を聞かなかっただけよ」
「…んー？……まぁいいや、それじゃあこの不祥霧雨魔理沙に教えてくれよ、刀子さんが今なにをしてるか」
野次馬根性全開の魔法使いである。
……まぁここまで言って言わないのもそれはそれでどうだろうとは思うけど。
「刀子さんは……」

歩く。
――あぁ、どこまで来ただろうか。これは何回目だろうか。
「終わりね」
「ま、待ってくれ…！命だけは…」
「その命はさっき終わったわ」
「え――」
走る。
――何度終わらせたか。何度終わらせられたか。
「つまらないものね」
――見上げた。
「…あら、今日は月が綺麗ね」
殺す。
「……今回は」
その次になにを言おうとしたのか、自分でもわからない。
「……ま、いいか」
意識なんて、とっくの昔にこんなのよ。
「私は刀子、ただの刀子。――でも、本当にそう？」
自問自答なんて、何度もやってきただろう？私は私、刀子は刀子。
「終わりのない殺しをずっと続ける愚か者」
それが私、私は刀子、ただの刀子。
「はて、私は一体なにを殺そうとしていたのやら」
何度繰り返したってわかんない。
いつからかは知らない、誰もわからない。
私だってわかんない。
「とりあえず殺そう」
だって私は刀子。最後はやっぱり、殺しに限る。
「……んー」
えーでは…
「なに考えてたっけ」
全部忘れた。まぁいいや。

ナイフがあれば暗躍もできる。

道具という物はそれぞれで、利便の為にと常日頃から改造、改良を繰り返している。求められる限り、進化を続ける物達。

端的に言えば、僕は道具が好きだった

「この道具なんてどうだい、『ジドウハンバイキ』と言う物だ。なんと喉の乾いた人間に飲み物を提供してくれるという素晴らしい物だ。僕の見た限りこの上半分に羅列されている物達が飲み物なんだろう、だが問題はどうやって飲み物を出すのかだ。僕的に殴る蹴るみたいな行動で飲み物出すとは思いにくい、それで飲み物を出すのは人間だけだ。つまりはなにかしらの手順を踏んで飲み物を出すのだと僕は思ったんだが……さてどこを触れば飲み物が出るのか…それがわからない。…あぁいや、わからない、をわかる、にする過程も僕は好きだ、子供っぽいが、楽しいものだよ。しかし、答えがわからないものもどかしいものだ。こういうのもなんだが、知識欲というのも中々馬鹿に出来ないものだ」

数多の人間が知識を求めて散っていったという話も少なくはない、未知への興味はある意味、どれだけ歴史が変わろうとも風化しないものなのだろう。

道具を見ながら僕は思う。

「だけど、知らないことも幸福なのではないか。と思うようになってきた、君のお陰か」

好奇心、猫をも殺す。

知ってしまえば最後、後戻り出来ないことだってある。無知は罪だが、逆に言えば罪以上のことはない。…先ほど出てきた知識を求めて散っていった人間のように、終わってしまうわけではない。

そうだ。

知る、ということはある意味の終わりだ。それ以上考える余地もなく、思考が挟む場所もない。

打ち止め。

全てを知りたくて、全てを知ってしまった存在の頭はどんなのだろ

うか。疑問というのは尽きないが、その疑問の答えすら知っている全知なんて存在の人生は、どれほどつまらないのだろう。
…彼女を見る度思う。
「……いや、君の事が気になるのはもう仕方がないことだろう。『まるで道具』のような君は僕からしてみれば興味を惹かれてしょうがない」
彼女は首を傾げた。
「君はなにを知ってる？なにが目的なんだい」
好奇心だどうだとか言っておいて、僕は彼女のデリケートな部分に触れていた。
わかっているとも。しかし、これは僕しか言えないことだ。賢者だって、絶対に聞けやしないだろう。
「君は、そんなに殺してなにをする。そんなに殺しておいて、どうしてあの娘に」
僕の言葉は、そこで止まった。
止められたとも言う。
…首にナイフを突きつけられて、口を開けたら顎が切れてしまうからね。
「その答えは『前に答えたわ』」
前…？
と疑問を返すことも出来ない。
彼女は有無を言わさぬ目で、その血のような赤い目で、僕を見つめる。
だが今更だ、彼女の殺意など、数えきれない程浴びてきた。嫌な気分だが、馴れた。…馴れたからといって動ける訳ではないが。
「そしてその答えは前にも今も変わらない。
私は殺すだけ。一切合切、なにも残さず、殺し尽くす」
口を三日月に歪めて、彼女は言う。
殺すことだけしてきた彼女らしい答えだろう。
……だが、僕には、その顔が酷く歪んで見えた。見えただけかもしれないが。

「…アナタを殺さないのは気分がノらないだけ。私だって殺したい時と殺したくない時だってあるわ」
「本当に？」
「本当よ？」
気がつけば彼女の手からナイフが無くなっている。
全く、油断ならない。何時無残に殺されるかわかったものじゃない。
溜め息を一つ。
「わかった。わかった。僕はもう何も言わない、そもそも僕はそういうことにはあまり首を突っ込みたくない。君は君で、僕にはわからない”やろうとしている”ことをするといい」
お手上げ、と言わんばかりに両手を挙げて彼女を見送る。
ニッコリ、と見惚れる…よりかは寒気を感じる笑みを浮かべて、彼女は出口へ去っていく。
……そうだ、一つ。聞いてないことがあった。
「今日は結局、なんの用だったのかな？」
彼女は足を止め、首だけ振り返った。
彼女はまだ　酷い／醜い／綺麗　な笑みを浮かべていた。
「死に場所探し。」
そんな彼女の顔を見て、僕は思った。
『使われてるのは、人と道具、どっちなんだろうな』

―――

「……おぉ、これはこれは……『へっどふぉん』か……どうやら音楽を聴く道具のようだが…」
「おーい、なー、聞いてんのかよー」
「構造的になにかを挟むようだが…やはり音楽を聴くなら耳か？頭につけて……はて、どうやって音楽を流すのか」
「おいこら聞け」
「……なんだ、魔理沙。こんなところにまで押し寄せて、一体なんの用があるんだ」
　すっごい嫌そうな顔で、すっごいデカイ溜め息を吐かれた。
　無縁塚の入り口で道具漁ってる奴に。
「私、店の入り口からずっと居たよなぁ!?見てないフリしやがってわかってんだぞ!?」
　全く…こんな美少女が来てやってんだから喜べよ…この男は…
「美少女……？」
「はいそこ疑問符をつけない」
　はぁ。ともう一度溜め息をついて白髪の男はなんやら小さい椅子のような物を取り出して、そこへ座った。
　…ってなんだそりゃ
『携帯椅子』。そのままだ、携帯できる小さい椅子。そこまで重くもない」
「へー…なぁこれ」
「残念だが非売品さ、これは私物でね」
「……」
　この男。道具屋なんて営んでいる癖に、売り物の殆どを私物にしやがるのだ。これ、いーじゃん。なんて思った品物は大概この男の持ち物である。
　それでもしつこく頼むとイラついてツケのことをグチグチ言ってきやがる。
　付き合いの短い真柄でもないのになんて淡白な奴だ、もっと贔屓し

ろよ。
「客は選ぶタイプでね、ツケを払ってから言ってくれ」
おっと、この話題は虚空の彼方へ投げ飛ばすとして。
私の聞きたいことは聞いていたのだろうか、それが目的で何度も言っているのにこの男、道具の事になると少し視界が狭い。
だからって顔馴染みをスルーするか？ふつー。
「…しょうがねぇからもう一度聞くぜ、ちゃんと聞けよ。
『刀子って奴はどこにいる？』」
私の目的は刀子と呼ばれる存在を探すこと。その為に、おそらくその存在と関わりがあるであろうこの男を問い詰めに来たのだ。
……なんで関わりがあると知っているのか。
そりゃまぁ？私の？頭脳を持ってすれば？簡単に推理出来ま
「霊夢に聞いたか」
……。はーい、そうだぜー
「はぁ……」
男はやたら長い溜め息を吐いた。
……長い付き合いの私だからわかるが、こいつ、今話をすることを最低まで嫌がってる。最低も最低、そりゃもう憎いレベルで話したくないご様子だ。
「一応言っておく。僕はこの件には一切関与しないことにしている、この事態は、僕には一切関係ない、そういうことにしている」
……そりゃまた、随分と否定的だな。
彼は確かに、この手の荒事には徹底的に無関心と無関係を貫くことは随分前からそうだが、ここまで否定的なのは初めてだ。嫌々でも情報を話す普段とは違う、とても強い意思を感じた。
「僕はこれでも彼女へは感謝しててね、これはそのお返しの一環だ。だから、彼女がやることには僕は何もしない」
「……何故か、って聞いても答えないなその様子じゃ」
「あぁ。だから早く次の場所に行くといい、さっさと行って、いつもみたいに解決するといい」
…なんだか何時もと違う反応に、私はキョトンとした。

「なんだぁ？お前そんなに異変解決に積極的な反応したことあったか？」
私の記憶が正しければ、彼に異変のことを相談をしに行っても、解決未解決に関してはどうでもいい、というスタンスだったような気がする。
それがどうか、今回のこいつは早く解決することを望んでいるように聞こえる発言すらしている。
「……別に、関与しないといっても、事態が起これば僕も被害が出るからね。道具が集められなくなる」
「…ん…んん…？そうか…そうだよな……わかったよ」
なんだか腑に落ちないが、これ以上は取り合っても無駄だろう。私は踵を返すことに…
「…そうだ。これはこの事態とは一切関係ないし、僕も独り言のつもりで話すが…」
思わず足を止めた。
「死にたくないならやめろ」
私が振り返った時、彼はもう背中を向けて森へと歩き出していた。

面白くない。
『……』
つまらない。
『……』

おんなじ作業の繰り返し。
『……』
そう決められた道具みたいに、私はただ繰り返す。
『……』
いつか終わりが来るだろうと、いつか止まるだろうと。
ただただ繰り返し、繰り返す、繰り返せ。
『……カ……ッ』
まーた殺した。
「さよなら」
あー楽しい。
つまらない。
あー嬉しい
楽しくない。
ずっとやっていたいな。
もう飽き飽きだ。
こんな有象無象殺したってなんにも感じない。
「何人だっけ……まぁいいか」
どっちが本当、どっちが私、私は誰。
殺したい奴はどこにいる。
私はトーコ、ただのトーコ。
「お前は…」
また一匹来たみたい。だったらどうする?
殺せばいい。
「隙だらけ、ね」
ゆっくり近付いて来て、ゆっくり構えて、ゆっくり突き刺された。
「…な…っ…いきなり…っ!?」
箒で弾いて私は構え…
「邪魔ね」
しかし敵は目の前に居らず、直後に左半身から感じる喪失感、私は

咄嗟に左を向いて。
腕のない自分の肩から先を見て、私は弾かれるように上へ飛んだ。
「はぁ…ッ……ぐっ…！」
遥か上空まで逃走してから、私は頭を回転させ、考える。
どうする？どうする？
まずは治療だ、その後は？
逃げる？戦う？
無理だ、逃げろ。
汗が止まらねぇ。
敵は？相手は飛べるのか？
飛べるなら治療は隙だらけだ、だが敵の姿はない。
ならば飛べない？
どうだ
治療を
逃走を
逃げた。
恥もプライドも捨てて全力で逃走した。
「なんだよ今の…」
やけに冷静な自分に驚愕だった。いや、冷静ではないか、一周回って逆に頭がシャットアウトしているのだ。
頭があまりの事に反応がしきれていない。
腕がなくなったことにも、突然攻撃されたことにも。
逃げる選択を選べたのは奇跡だろう、あと数秒遅ければ首が落とされていた。
血も魔法で止めているが、重症だろう。
「弾幕ごっこ…なんてやる口じゃねぇとは思ってたが…」
ここまで理不尽とは思わなかった。
いや言い訳だ。
私の覚悟が決まる前に殺しに来たのだ、戦う前に殺しに来た。殺し合いなら正解だ。

油断していただけだろう。
『スペルカードルール』が普及した現在、私はそれ以前の戦いの経験は少ししかないが…彼女はそんなルールは知ったこっちゃないのだろう。勿論、普及したと言っても守らない奴だっている。所詮はルール。
だが、それにしても彼女の殺意は正直経験したことがないレベル。
殺す、殺さない。
彼女はそれだけ。霊夢の言っていた意味がわかった気がする。
「ぐ…ぅ……痛ってぇ…どうする…」
逃げるなら霊夢の元が安全だろうか。しかし体力的にそこまで行くのは辛いか…一番近いのは紅魔……
「…待て、どうして腕しか切られなかったんだ」
あれだけの速さがあれば追撃も可能だった筈だ。
それに、急所ではなく腕なのも考えれば変な感覚だ。
「なんで…」

「何時でも殺せるから。なんて言ったらどうかしら」

ゾクリ
背後からした声に恐怖を覚えて振り返っ……
「がっ……ぁ…」
の　ど　に……な　い　ふ　が
「空飛ぶ箒とは面白いものね、でも飛ぶのに物が必要なのは邪魔じゃないかしら。それともファッション？」
こえがでない
こきゅうができない
いたすぎてなんにもかんじない
おかしくなる
しぬ

しぬ
しぬ
ころされ……
「霊夢のお友達だけど、仕方ないわよねぇ。私の前に来たら殺されるだけよ」
さよなら。
そんなこえがきこえて…私は…
「んー…？」
……ただで
「ころされてたまるか…」
私は持っていた物へ魔力を使い。
瞬間、閃光が走った。

?????????

「……」
持っていた湯呑みにヒビが入った。
…不吉だ。誰かが死んだか、これから死ぬのか。
なんとなく、腐れ縁の魔法使いが頭によぎる。
……こういうとき、この体の第六感は残酷だ。
原因も、やっぱり、そういうことなんだろう。
嗅ぎ回っていたことは知っていた。好奇心だけで彼女に関わるとどうなるかも、遠回しだけど伝えたのだけど。

そういうことで止まる人間でもなし、人間らしからぬ無鉄砲さだ。いや、むしろ人間らしいのだろうか。
……やはり、無理してでも…
「……はぁ」
感情的なのはよくない。特に、彼女と相対するかもしれないのだから、それは捨てるべきだ。
……でも、そう。やっぱり、私だって人間だもの。時には感情的になってしまうのも致し方のないこと。
「…」
持っていた湯呑みを手で砕く。
私は博麗の巫女だ。
しかし、その前に人だ。それは、彼女から教わった。
「刀子さん」
彼女の危険だということは、一目会った時から『なんとなく』わかっていた。
彼女は殺意を隠さないが、私へ対してだけはその殺意を隠そうとしている節があることも、『なんとなく』気づいていた。
彼女が私に対して何を思うのか、何故殺さないのか。それはわからない。でも
「アナタがもし異変すら起こそうというのならば」
博麗の巫女として。いや、人としても。
私はアナタを滅する。
そう、私は決意する。
「…勿論、そこに少し仇討ちもあるけどね」
そのぐらいのオマケなら仕事に支障はない。むしろ、いいスパイスね。
なぁに、心配ない。事が起こったならば、さっさと終わらして、何時も通りお茶でも飲むわ。
私は、博麗霊夢ですから。